

第2回 ふくしま元気トーク まとめ



【開催概要】

日 時	平成30年10月14日（日） 午前10時30分～正午
テーマ	わたしたちがつくる県都ふくしま ～10年後の福島市を考える～
場 所	福島学院大学 宮代キャンパス 本館（カーサ・ビアンカ）1階ラウンジ ※福島学院大学の学園祭「第52回 のぎく祭」会場で開催
出席者	福島市内の大学に通う大学生の皆さん (1) 福島大学大学院 共生システム理工学研究科 菅野 怜さん (2) 福島大学 人文社会学群 経済経営学類 小林 エリカさん (3) 福島大学 人文社会学群 行政政策学類 前田 悠さん (4) 福島学院大学 福祉学部 こども学科 渡邊 駿さん (5) 福島学院大学 福祉学部 福祉心理学科 高橋 秀太さん (6) 福島学院大学短期大学部 情報ビジネス学科 佐藤 翔さん (7) 桜の聖母短期大学 キャリア教養学科 本多 紗生さん (8) 桜の聖母短期大学 キャリア教養学科 安田 美乃里さん (9) 桜の聖母短期大学 キャリア教養学科 阿部 杏子さん (福島市) 木幡市長

【1 市長あいさつ】

学生の皆さんとは、なかなか市の事業でお会いする機会もなく、お話を聴く機会は貴重ですので、本日は積極的にご意見いただきたいと思います。

福島市と市内5大学、経済界との産官学で作っております「福島市産官学連携プラットフォーム」の最初の事業が、この第2回「ふくしま元気トーク」です。本日は、福島学院大学のキャンパスで学園祭の場をお借りして開催しています。これから大学を中心に福島市がどう変わっていくかというのも一つの試みとなります。

本日のテーマは「10年後の未来」です。ご存じのとおり、東日本大震災以来、「復興」というのが本市の一番重い課題です。一方で人口減少という流れもどんどん深まっており、「復興」というテーマだけでは、私たちは未来を語ることはできません。「復興」を越えた未来の姿を思い描いた上で、「復興」の取組みと同時に、新しい福島をつくる取組みをし、人口減少社会に対応する必要があります。

本日は、10年後に働き盛りの30代を迎える皆さんの感性・ご意見をしっかり受け止め、10年後の新しい未来をつくっていく話し合いの場にしていきたいと思っております。よろしくお願ひします。



【2 福島市の良いところ・良くないところについて】

(1) 良いところ

- 美味しい食べ物。品種ごとに味わえるくだものや、ラーメンなど。
- くだもの狩りや温泉巡り。これだけ温泉があるのは魅力。
- 人の温かさ。お祭りや日々の生活のなかで、福島市の積極性や団結力を実感する。人と人の繋がりが豊か。自ら距離を詰めていく姿勢がよい。
- 特に福島駅東口には、雑貨店など面白いお店が点在している。
- 四季それぞれに魅力がある。春は花見山、夏はわらじ祭りなどのお祭り、秋になると美しい紅葉や豊かな野菜やくだもの。冬は降雪量がちょうどよく、生活がしやすい。
- 市内に5つもの大学がある環境は、それだけ若い人が集まっているということ。また、卒業後も市内または市内周辺に住み続ける潜在性があるということ。



(2)良くないところ

- 情報発信が不十分。
- 駅前に人がいない。お店が少ない。
- 大学生など若い人たちがたくさんいるのに、若い人たちが買い物できる場所は駅の商業ビルなどに限られてしまい、買い物は結局仙台方面やネットショッピングに流れてしまっている。
- 若者と市が求めるニーズにギャップがある。若者世代からすれば、娯楽施設が物足りない。
- 大学の学生のほとんどは市外出身者が占めるのに、福島の魅力が伝わり切らず、在学する2年ないし4年で去って行くのはとてももったいない。
- まちなかの英語表記について、すべてに表記があるわけではなく、あっても文字が小さかったりする。外国の方にとっては住みづらかったりするのではないか。
- これだけ市内に多くの大学があるのに、大学間の交流があまりない。



《良いところ・良くないところに対するアイデア》

- 市内の人が改めて福島市の魅力を感じられる機会があれば、福島市の活性化につながるのではないか。
- 首都圏や他地域の学生など若い世代の人たちを福島に呼ぶ機会を作りたい。この夏参加した県事業「スタディツアー」では、実際に福島市に来た方々には本市の良さを実感してもらえた。若い世代は経済的に余裕がない方も多いため、その点の配慮もできればよい。
- SNSをもっとうまく活用すれば、伝えたい情報の認知度が上がる。
- 学生が多い利点を活かし、市内の面白い店の情報などを、学生同士がSNSなどで共有できるといい。
- 親子連れが参加できるようなイベントが増えれば活性化に繋がる。
- 「あそこのスイーツはどこの果樹園のくだものを使っている」という市内のお店と果樹農家の連携の情報を地域内で広められれば、もっと地域が活性化するのではないか。



市長

魅力はたくさんあるが、皆さんに伝わっていないという意見が多かったですね。

市内に5大学もあるというのは、確かにアドバンテージと感じています。今後、全国的に少子化が進めば、大学間の競争のなかで、淘汰される大学と生き残る大学が出てくるのが想定されます。市内の大学が今後どう生き残っていくのかは非常に重要な問題です。まずは地域の皆さんと一緒に市内の大学を優良校としていきたいと考えています。

また、大学生を地域にとどめておくことも重要です。例えば「ずっと福島市応援プロジェクト」のように、市内の魅力ある企業・経営者等が学生にPRすることで、卒業後の定住・定着を目指す取組みは、今まで各企業で行っていたわけですが、今後は市も中心になって機会を作っていきたいと思っています。産官学連携プラットフォームのような場ができたことは大きな意味がありますので、これを活かしてどんどんやっていきたいと思っています。

【3 10年後の福島市について】

市長

現在日本中のさまざまな地域で、生き残りをかけ、魅力づくりなど地方創生の取組みを進めています。私たちも「福島のこれがいい」「これを知ってもらいたい」という情報を単に発信してだけでなく、その魅力をよりいいものにしていくという努力が必要です。

東日本大震災以前は、福島市は県外の方にとっては大変地味で所在地も定かではないところでしたが、原発事故の発生により、イメージの良し悪しは置いておいて、世界に「福島」という名前を否応なく広めたのも事実です。同じ情報でも、何もないとところが情報発信をしていくのと、注目されているところが情報発信していくのでは取扱い方が全然違います。この環境を活かすことができれば、福島市はこれまで得られなかった成果を得られると思いますので、大いなる野望を抱いてまちづくりを進めていきたいと考えています。

(1) オリンピック開催に向けたバリアフリー化について

- 身体障がい者のほかにも、心に障がいを抱える方や周りに話しかけられない方もいる。そういう方々のための案内所やセンター等の施設の整備が必要だと思う。
- 段差解消など物理的なバリアフリー化だけではなく、「障がいがあるためにできない」という概念の撤廃など、障がい者の方々の生活向上につながるような取組みを行うNPO法人等の団体の設立がまず必要だと思う。



市長

オリンピックはスポーツの祭典であると同時に、いわゆる共生社会や文化的な取組みへのきっかけであることを理念としています。本市でも文化プログラムへの参画促進を通し「地域が輝く文化都市」を目指すとともに、事前合宿の誘致・受入れのために障がい者スポーツの環境整備をし、障がい者スポーツをするだけでなく、バリアフリーへの取組みを一段と進めようと検討しています。

「障がい者スポーツ」は、障がいの有無に関わらず、お年寄りや小さいお子さんも皆さん取り組めるスポーツです。分け隔てない参画を推進するとともに、いわゆる差別意識の撤廃な

ど、心の面でのバリアフリー化の推進も必要です。単に差別の撤廃にとどまらない、障がい者の皆さんがいきいきと地域の中で暮らせる条例をつくっていかねばと考えています。

(2) 住みやすいまちの整備について

- 市内でいきいき生活できる一番のポイントは、若者や子育て世代、中年層が市内で買い物ができるように、デパートなどの商業施設を増やすということだと思う。
- 大学のまわりの地域には、若い人が全然住んでいない。新しい住宅の建築などの開発が制限されていると聞いた。スーパーもなくコンビニしか買い物できる場所がない。10年後自分が結婚して子育てするとしても、子育て支援が整っている、生活環境がもう少し快適な場所で住みたいと考えてしまう。
- 福島市人は全然除雪しないことに驚いた。駅前も誰も除雪しないので、踏み固められてツルツルに凍っている。なぜみんなでシャベルを持ち寄って除雪しないのか。大学の雪かきボランティアに参加しているが、誘ってくれた子やメンバーを見ても、雪が多い地域出身が多い。雪が積もると自分もみんなも困ることを知っているし、雪かきは自分たちでして当たり前だと思っているからだと思う。雪が多い地域出身としては、除雪は生活する自分たちがして当然という意識があるので、ボランティア募らないと雪かきできないというのは悲しいが、それで集まるようであれば、ボランティアは必要だと思う。



市長 中心地のそとでまちづくりを進めれば、中心市街地の空洞化という問題も生じてきますので、「市街化調整区域」を設定し、そこでは住宅や商業施設をあえて建てないようにしています。「市街化調整区域」を今後どうしていくかということは、まちづくりの難しい問題です。

除雪については市民の皆さんにもお願いしていかなければいけないことですが、高齢者のひとり暮らしが多くなっていますので、それが難しくなっています。学生ボランティアを「使う」ということではなくて、ボランティアなどいろいろな経験をしたいという学生と地域のニーズを繋ぐという意味で、学生ボランティアの皆さんとの連携できる仕組みを、お互いにウィンウィンになるような関係でやっていきたいと考えています。また、除雪に限らず、農家の働き手も今非常に少なくなってきましたので、学生が農家体験として剪定などを手伝い、代わりに収穫の一部をもらうというようなボランティアも考えていきたいです。

(3) 子育てしやすいまちづくりについて

- 未来の私たちを支える世代を育てるのは私たち。その世代の子どもたちを保育できるような環境づくり、人材育成にもっと力を入れていけば、福島市により根付いてくれる人が増えると思う。
- 例えば自然が豊かな環境やさまざまな遊具を備えた園庭など、保育施設の充実も必要である。
- 女性目線で、出産後仕事に復帰しやすい環境を整えてもらいたい。
- 子育ての前に「結婚」。奨学金を借りていて、結婚できるか不安に思うこともある。結婚に対する支援、



例えば婚姻届のデザインの工夫やお祝い金があると、福島での結婚に魅力を感じてもらえるのでは。

- 「婚活パーティー」と言われると身構えるので、もっと気軽に参加できるような、街コンや婚活イベントがあるといい。ある自治体では、図書館で婚活イベントをやっており、趣味など自分の好きなものを共有して出会える環境で開催されるのも面白いと思った。

市長 現段階では、待機児童の解消が一番の課題になっていますが、待機児童解消はマイナスをゼロにする取組みです。十何年後を考えていけば、次に「ゼロ」をいかにプラスにしていくか、保育の質の確保や施設などのプラスアルファを考えていく必要があると思います。特色ある保育という視点、福島市らしい自然豊かな環境での保育などは、とても面白いなと思いました。

「結婚」に対する支援についてですが、単なるお祝い金だけだと少し物足りないかなと思いますが、趣味を共有できるような婚活パーティーは参考になりますね。婚姻届については、福島市オリジナルのももりんデザインの婚姻届を作成していますので、ぜひ一度見てみてください。福島市に婚姻届を提出されたご夫婦には、記念品もお渡ししています（「ももりん記念日祝福事業」）。我々ももっとPRしていく必要がありますね。

（４）中心市街地の再開発などについて

- 「ももりんバス」は100円で乗車できるので駅に行きやすい。中心部を鍛えるなら、「ももりんバス」の範囲拡大など、交通網の利便性向上が必要だと思う。住んでいる自治体にはないのでうらやましい。
- 地元のある美術館には、施設内に子どもを一時的に預けられるコーナーがあった。なおかつ屋上には遊具のある庭園があり、子どもを遊ばせることができる。美術館などの施設は小さい子どもと一緒にどっくり回れないので、そういうサービスがある施設が市内にあってもいいのかなと感じた。
- 子どもたちがのびのびと遊べる、自然がいっぱいで遊具が豊富な公園が駅前にあるとよい。音楽のまちななので、野外ステージのようなスペースもあつたらいいのでは。
- コンベンション機能施設であれば、学生でも借りられるくらいの規模の部屋や、「学割」の料金設定があれば、学生は利用しやすくなると思う。学生が公共施設を使用しやすくなるというのも、まちづくりの重要なポイントではないか。
- 駅前キャンパスに通う途中、たくさんの花を見かけ、「花があるまち」を実感している。もっと「花があるまち」を浸透させるために、「花」に関するイベントなどを開催してはどうか。



市長 単なる賑わいだけではなくて、将来子育てのことなどを考えると、子どもたちにとっていいまちにしないとイケませんね。

福島市は、花見山を中心に「花のあるまち」、古関裕而さんの「音楽のまち」でもありますので、「花」と「音楽」をテーマにすれば、他地域と差別化できるのではないかと考えています。

人を呼ぶためには交通手段の整備が必要です。しかし、バス会社に交通網の整備を求める場合は、採算が見込めなければ、我々も税金で負担するなどの工夫が必要になり難しいですね。

コンベンション機能は、実はニーズが高いと思っています。震災をきっかけに、「福島を応援してあげよう」という気持ちが全国的に高いので、福島市での大学の学会や福祉施設の全国大会などの開催などの声をいただいています。浜通りは特に原発関係で世界から注目されていて、多くの人たちが研修や勉強に訪れています。そこで浜通りに入る前に、本市で会議などが開催できる場所を提供できないかと考えています。

ただし、駅前のコンベンション施設は、立地条件からかなりのコストを要します。学生さんだからと使用料を安くし、使用を優先してしまうと経営面の影響が考えられます。学生の皆さんには、今度完成する医大新学部の建物内のスペースを皆さんで使えるようにするとか、チェンバおおまち内の「福島市市民活動サポートセンター」などの活用を考えていただきたいと思います。また、街なか広場の向かいの以前東口行政サービスコーナーがあった施設は、今後はにぎわいの拠点として、皆さんが気軽に集まれるスペースにしたいと考えています。

イベントに関しては、実はまちの中心部でたくさんのイベントをやっていますが、多くが市民向けのものと感じています。これからは、外から人を呼べるようなイベントを開催していかないとはいけません。ちなみに来年は、東北6県都のお祭りが一堂に集まる「東北絆まつり」を福島市で開催します。6県で集客数が最も多いのは「青森ねぶた祭」で286万人、5番目は山形市の「山形花笠まつり」で99万人。6番目は本市の「わらじまつり」で29万人と、規模にかなり格差がある状況です。外から人を呼べる祭り・イベントを開催して、多くの方に認知されることにより、市民の皆さんの地元に対する誇りも高まるのではないのでしょうか。

(5) 風評の払拭について

- 検索エンジンで「福島」と検索すると、震災関係の画像が中心に表示される。10年後は、福島の美しい町並みや人の笑顔が表示され、「行ってみたい」と感じてもらえるような場所になって欲しい。
- 10年後、「どこから来たの?」と聞かれたら、堂々と胸を張って「福島です」と言いたい。
- 震災以降、「福島」は世界的に有名になっていて、みんな知っているという固定概念があったが、実際アメリカの学生と話すと、「福島」自体を知らなくて驚いた。福島の魅力を伝えるにあたっては、相手の「福島」に対する知識を、伝える側も理解する必要があると感じた。
- SNSでは、なるべくハッシュタグをたくさん使って、多くの人に覚えてもらえるよう心掛けている。海外の方を意識し、英語表記のタグを必ず一つはつけるようにしている。



市長 現在は、「福島」と検索すると、どうしても原発がらみの写真が先に出てきてしまいますね。市民運動のように、みんなで福島市の魅力を発信すれば、イメージアップに繋がるような気がしますね。いいアイデアですね。胸を張って「福島から来ました!」というために、どんな福島にしていけばいいのかということがこれから大切だと思います。

(6) 若者の地元定着について

- 人口が減り、少子高齢化も進行していく中で、若者が地元で定着するのかを考える必要があると感じている。市内に大学が多くあることはアドバンテージなので、大学間の連携を深め、福島市に根づく若者が増やし、最終的に各産業・分野に分散していくことが理想。その土台づくりが大切だと考えている。そのため、福島市の魅力をもっと知って発信し、それを自分で感じ取って、発信した学生自身が福島市に根づくうまいサイクルを作ることができる学生団体を作れたらいいと思っている。
- より良いまちづくりのためには、一旦外に出た人の目線というのは重要なので、他県に進学した友人たちがUターン就職してくれる環境にしていく必要がある。そのためには、交通の利便性の向上や、買い物しやすいなど生活しやすいことがやはり重要だと思う。
- 若者が福島で夢を持ち、叶えられるような環境づくりが必要である。
- 福島に住んでいる人たちが地元で愛着がなければ、県外の人でも寄ってこない。福島に住んでいる人たちに福島を知ってもらうために、行政と学校が連携して、授業の座学の中だけではなく、実際にその場所に行って、見て、体験するなど、若者に福島を知る機会を与えることが必要だと思う。
- 福島は車社会なので、福島の魅力である温泉やくだもの狩りには車を使わないと足が伸びない。カーシェアリングや乗り合いタクシーは、好きな場所で乗り降りができ、学生にとっても魅力的なので、学生を対象にした乗り合いタクシーなどの制度があるといい。導入にあたっては、大学での研究として、最適経路の特定、導入方法、公共交通機関との共存を考える人材もいるはずなので、そういった分野で、大学間の連携が取れたらよいのではないかな。
- 地元で応援したくなるスポーツチームがあるといい。市全体がチームカラー一色になるような一致団結できるチームやイベントがあれば、生活も楽しくなり、福島市をもっと好きになると思う。



市長 大学間の連携は、本日を機にぐっと進むことを期待したいと思います。

行政との連携については、今の学生の皆さんは本当に忙しくて、なかなか授業に取り入れることが難しくなっている一面もありますが、今後深めていきたいと考えています。

来年福島大学に食農学類ができますが、パートナーシップを結んで、食農学類と一部の学校で、食育に特化するなど特色ある教育を行っていくのも面白いですね。

私たちは企業とも連携協定を結んでいて、例えばIT分野の企業であれば、社員の方に学校に来てもらい、ITの取組みと一緒にやってもらうことで、子どもたちのITへの理解度や関心が格段とあがり、企業も名前を売ることができる。そういった取組みをしていきたいです。

「乗合タクシー」は、今までは高齢者など交通の手段がない方の最後の手段としての視点でしたので、学生を対象にするという発想は、我々にとってはとても新鮮ですね。

(7) その他

- 若者の常識を育成する必要があると思う。若者の多くは、時事情報はネットニュースで収集できると考えているが、県や市の情報を取り入れる最も有効なツールはやはり新聞である。情報発信をするには、

「SNS」という若者の長所を生かすという考えもあるが、ネットの情報は自分で取捨選択するため、若者の趣向が強い芸能やテレビなどの情報に偏り、県や市などの地域の情報にはどうしても目が行かない。

- 災害ボランティアに参加して感じているのは、県内の避難者の情報を共有できるように、市内の大学だけではなく、県内の大学間で連携を図っていききたい。県内の避難者の皆さんがどういう風に暮らしているかという情報がなかなか入ってこないのととても心配である。



【参加者の感想（参加してみたの抱負や決意など）】

- 生まれ育ったまちは、一生意識していく場所になるので、そのまちを誇り高く思えるように、素晴らしいまちになることを期待している。
- 参加者のいろいろな意見を聴いて、知らないことがいっぱいあったので、これからも福島市の将来について考えていきたい。SNSで福島の魅力の情報発信するときのタグ付けも続けたい。
- 唯一の県外出身者だったが、まだ1年半しか住んでいないので、まだまだ福島市たくさん魅力があると思う。私の口から自分の親や親せきに福島魅力を伝えていきたい。自分から始めていきたい。
- 保育に携わる身として、子どもたちに福島魅力を伝えられるようになりたい。また福島のスーツなど、福島魅力をどんどんアピールしていきたい。
- 大学で学んでいる「我が事・丸ごと」や地域共生の重要性を、本日改めて感じた。外から見れば魅力的であることが、県内・市内に住む人からは当たり前で気づかないということがあったと感じたので、もう一度自分たちが客観的に視点をかえて地元をみってみる必要があると感じました。
- 福島市に通学するようになって半年しか経っていないが、福島市の温かさに惹かれて、福島市で就職して、福島市に根づいていきたいと思っている。なぜそう思っているのか、残りの学生生活の中で、言葉で表現できるようになり、広めていきたい。また、他大学との連携も少しずつ深めながら、活動していきたいと思えた。
- 今回県外や市外出身の方からもたくさん話を聞いて、いろんな視点があるということに気付いたので、その気づきを今後に関し、自分のSNSを利用して、福島魅力を発信していきたい。
- 福島県や福島市には、いいところがたくさんあると思えたので、県や市が企画している事業とかにどんどん参加して、もっと福島市を知り、情報発信していきたい。
- 今回いろいろな方の意見を聴いてたくさん学ぶことがあった。今できることがあれば、今からどんどんやっていきたい。

